

平成26年度第3回古賀市文化芸術審議会議事

日時：平成27年3月3日（火） 10：00～

場 所：市役所第1庁舎4階第3委員会室

出 席：審議委員 緒方会長、中山副会長、加藤委員、河村委員、古賀委員、坂崎委員、
志賀委員、古川委員、米倉委員

行 政 中村市長、荒木教育長

事 務 局 山田生涯学習推進課長、西村文化・スポーツ支援係長、田中主事
力丸サンフレアこが館長、村山歴史資料館館長、中野歴史資料館係長

配布資料

レジュメ、平成26年度文化芸術関連事業報告書、平成27年度の審議会開催スケジュール

（司会：西村文化・スポーツ支援係長）

1 開会のことば（山田生涯学習推進課長）

2 市長あいさつ

中村隆象と申します。前市長時代にアート・タウンという文化芸術の振興を掲げてきたが、市民に浸透していなかったように感じていた。しかし、退任している間も文化芸術振興計画やアクションプランができ、このように文化芸術振興が推進されていたことは大変うれしくなった。おかげさまで、再び市長になり、気持ちを新たに古賀市における文化芸術振興を進めていきたい。本審議会におかれましては、古賀市における文化芸術振興について自由に議論していただき、ぜひ今一段の文化芸術振興を考えていきたい。

3 教育長あいさつ

おはようございます。今、市長のほうからあいさつがあったように、中村市長は文化芸術について非常に思い入れの強い市長。中村市長時代の条例策定当時は、県内でも大宰府などに続き、文化芸術振興条例を作ったのは3つめで、非常に先駆けて文化芸術振興に取り組んできた。だんだんと文化芸術が生活の中でいかに大事かということが広がってきた。古賀市の場合は文化協会が条例や計画の精神を引き継いで市民の中に入っていこうというボランティア的な活動を行っていることも理由の一つ。また、古賀竟成館高等学校が学科再編のときにベイシックデザインコースをつくったことも大きい。県内に限らず全国的に活躍してくれているので、じわじわと影響が広がってきている。こういった例は、古賀市の文化芸術振興に大いに寄与するとともに、他市町村にとってもモデルケースになるのではないかと考えている。本審議会においても、本当に熱心に古賀市の文化芸術について議論していただけてきた。一番大事なことはそれぞれの市民が自主的に文化芸術活動に参加し、作っていくことだろうと思っている。今後ともよろしく願いしたい。

4 会長あいさつ

私は条例策定するときにも参画させていただいた。そのとき、市長が古賀市をアートタウン、文化が豊かな町にしたいんだと語られていたのを覚えている。それを受けながら、条例を策定され、審議会が設置され、計画を策定された。今後は、アクションプランに沿いながら古賀市の文化芸術振興を行っていきたい。市長、教育長のお話を聞く中で、文化芸術は人を育

てるものだと感じた。先日、イギリスの研究者の話を伺う機会があったが、「文化芸術とはヘルスリングにつながるものだ」という言葉が非常に印象に残っている。人を豊かにすることとは健康につながるものである。今後は文化芸術の分野だけでなく、文化芸術は福祉との連携も考えながら地域社会を作っていく必要があると考える。本審議会においても、今回は1年間の報告を受けることになっているが、次年度については、さらによりよい文化行政、行事が出来ていくことに期待をしながら活発な意見交換ができればと思う。

5 報告（以下、進行は審議会会長）

（1）文化芸術関連事業の実施報告について（説明：田中主事）

報告書の備考欄に記載しているアクションプランの該当項目の順に説明。

①文化芸術交流事務

文化協会への委託事業で、糟屋地区美術展と福岡 I ブロック芸術文化のつどいに関する事務を委託している。古賀市の主催事業ではないが、糟屋郡の1市7町の持ち回りで開催され、美術展には古賀市から毎年30点～40点出品している。今年度は、7点の作品が受賞している。つどいについては今年度は1市7町に加え、福津市、宗像市の持ち回りで開催され、今年度は古賀市から3団体出演した。

②文化祭

毎年10月に3日間、舞台発表と作品展示を行っている。今年度は台風の影響で3日目のみ1月に延期になった。昨年度との違いとして、今年度は子どもたちの作品展示として花鶴小学校と特別支援学校の児童作品の展示を行った。様々な演目を披露するので、幅広い層に親しまれ、「私も何かやりたくなりました」との意見も挙がった。

③地域の魅力発見講座

地域への文化芸術振興が十分でないという課題解決のため、地域の公民館を使い、その地域で活躍している方を講師とし、材料や素材集めを地域を歩きながら行うことで改めてその地域の魅力を発見してもらうことを目的としている。講座内容も家庭で簡単に出来るものを選んでいく。「いい講師にめぐり合えた。こんな方がいたなんて」「古賀に住んでいて初めてこんな場所を知った」等受講者には大変好評だった。

④コスモス市民講座

講演会、1回300円の初めてのチャレンジコース、市民持込企画コース、通年通して行う1コース1000円の古賀のいいトコ発見コース、いきいきコースからなる講座で、すでに市民に浸透しており、毎年多くの申し込みがある。数十の講座が行われており、文化芸術を含めた様々な体験が出来る。

⑤乳幼児絵本との出会い促進事業

子育て支援課と図書館が連携して行っている事業。生後4ヶ月の乳幼児とその保護者が対象となっている。ふれあいあそび、わらべうた、絵本の読み聞かせなどを行っており、絵本の読み聞かせを通して親子間のつながりづくりや親同士のつながりづくりの場となっている。初めて絵本と出会う保護者もあり、読み聞かせの楽しさやを知ってもらえたり、絵本の選び方の参考になっているという意見が挙がっている。

⑥レッツトライ！プロジェクト

前年度までの「寅さんと語る古賀の文化」という講座をリニューアルした事業で、文化芸術活動を行っている団体や個人を対象とし、団体同士のつながりづくりや古賀市の文化芸術について語り合える場作りとして実施。受講者が一体となって一つの事業を行うことを目標とし、3つ挙げた企画のうち、すでに2つは実施のために動き出しており、今年度中に実施予定の事業もある。また、本講座でつながった団体同士が別の企画を合同開催した例もある。

⑦公募型補助金（市民劇団 DAICOON）

子どもたちを中心に毎年行っている定期公演に加え、新しくワークショップを開催。ワークショップの参加者は5月、7月のワークショップを経て、本番のミュージカル公演に参加した。来場者アンケートでは約40%が「はじめて見る」と回答しており、例年来場者が増加している中で、まだまだ新規の来場者を開拓できる見込みがある。自主財源の確保が課題である。

⑧自然史歴史教養講座

市民が自然史や歴史について学ぶ機会として実施。全5回で、NHK 軍師官兵衛の放送を機に、黒田官兵衛や立花氏・黒田氏に仕えた武将薦野増時の史跡を訪ねたり、船原古墳の馬具について学んだり、歴史資料館20周年の歩みについて学んだりと3つのテーマをもとに実施。

- 緒方会長 ご覧いただいたようにアクションプランが起案となり、着実に様々な事業が行われているということがわかったのではないかと。委員から何か質問や感想があればどうぞ。
- 中山副会長 自然史歴史教養講座の参加者の年齢層は、
- 中野係長 正確に統計をとったわけではないので、ざっくりとしか言えないが、60代以上がほとんど。若い方の参加はない。
- 中山副会長 古賀の歴史を知れるととてもいい講座だと思うので、こどもたちが知れる機会となればいいと感じた。
- 緒方会長 人を育てることがアクションプランで大きな目標となっているので、古賀の歴史を知ることとたちをつくるんだということも重要な要素。来年度の企画ではこどもたちも意識してほしい。
- 中野係長 平成25年度には、こどもたちを対象に、古墳から出土した兜のレプリカ作りのワークショップを開催した。平成27年度も8月の夏休みの時期に、こどもたちを対象としたカメラをもって史跡をめぐる事業を実施予定にしている。
- 緒方会長 今まで地域のことが他人事だったこどもたちが自分のこととして感じられるいいきっかけになると思う。
- 古賀委員 今後は計画書と報告書が対比できるようにしていただきたい。また、平成26年度の報告のまとめの際には、アクションプランのどこに該当するかを図式化したものに事業を落としこんで、どこが手薄でどこが充実しているかなどが目に見える形にしてほしい。
- 緒方会長 アドバイスを踏まえて少しずつ見やすい行政文書の作成を行ってほしい。
- 中山副会長 7ページについてブックスタートといわれる事業になるかと思うが、こどもとメディアのグループワークをいれていたりとてもいい事業だと思う。若いお母さんたちからも評判がとてもいい。

緒方会長 順番は前後するが、市長の出席が11時までとのことなので、ここで一旦文化協会から提出されていた資料の説明を受けたいと思う。

志賀委員 白い表紙のほうからご説明をしたい。市民や議員さんの数人からのお声としてただの趣味の団体が広報の1ページをもらうのはいかがなものかとの意見が挙がっているようで、それを耳にした広報が広報ページを分散したものに變更してから1年間やってきた。ただの団体として見てほしくないとの思いから今回文化協会の歴史、成り立ちを知っていたく資料をお持ちした。文化協会の成り立ちとしては、町として遅れていた文化施設の充実はもちろん、自主性と創造性のある民間組織である文化協会の設立をいわれていたことから、社会教育委員と教育委員会で諮られ、昭和57年に22団体で設立された。図は過去9年間の文化協会の会員数、事業等に関する推移を示したもの。また、基本理念の策定の目的、期間と構成については記載のとおり。2枚目に移る。現在10事業を行う予定にしている。(図に沿って説明) 次に、古賀市文化芸術振興計画概要と対比して文化協会の歩みを記載したカラー資料について説明する。条例、計画ができたことで気づくことも多く、問題点や進むべき道が明らかになり、自信もついた。大変感謝している。アクションプランとの対比表の中に落とし込んである事業は、行政にご理解いただきながら膨らませていっている事業になるが、いつも突き当たるのは予算のこと。新しい事業をおこしたいと考えたときに、予算がない。印刷代など多くのことを工夫しながら進めている。

緒方会長 ご報告いただいたように、アクションプランに沿ってそれぞれの事業を展開しているというところでは、条例ができ、審議会が設置され、振興計画が策定されるという順番をおいながら、文化協会も成長している。

6 協議

(1) 来年度の文化芸術審議会の開催日程および内容について(説明: 田中主事)

平成27年度の文化芸術事業および生涯学習推進課で行う主な事業を一覧にしている。あくまで予定。6月、9月、12月、3月は議会がある関係で、審議会の開催が難しいことから記載のと通りのスケジュールで行えたらと考えている。

緒方会長 来年度の事業の中でスクラップした事業や新規の事業はなにかあるか。

事務局 新規の事業としては、12月10日～13日に予定している公募型補助金事業の絵画で古賀市を元気にするプロジェクトというものがある。実行委員会形式で古賀アートフレンズ25という団体が事務局となり、市内のこどもたちの絵画を募集し、審査し、優秀なものに関しては表彰・展示をする予定である。西鉄バスのギャラリーバス事業や、千鳥苑、美原園等でも展示予定。また、新規の事業ではないが、青少年育成課のアート教室との合同事業で親子アート・バスという事業を6月頃に実施予定。こどもたちだけをバスに乗せて美術館へ連れて行くアート・バスを親子対象に全小学校を初めて実施する。

緒方会長 市長の在席時間が残り少なくなってきたのでお伺いしたい。いままでの話や26年度の報告、27年度の計画を聞いていかがだったか。市長に突然話をふるのは失礼だとは思いますが、ぜひお声をきかせてほしい。

中村市長 現在、景観基本計画というものがあり、ゆくゆくは条例も策定したいと考えているが、そういったものとも関わりながら振興を行っていかれたらと思う。個々の事業をご審議いただくのも大切なことだが、全体的なバランスや事業の実施時期などについても気楽に意見交換していただければと思う。

- 緒方会長 そういつていただくとこの審議会ものびのびできると思う。この審議会自体は年に3回という限られた回数しかないので、今お話いただいたように新規の事業や既存の事業に関しての新しいアイデアについても議論していけたらと思う。審議委員は様々な分野のから集まっているので色々なアイデアも出ると思う。
- 中村市長 アートウォールについてどういう印象だったかお伺いしたい。
- 緒方会長 その節は九州産業大学の学生も壁にひまわりの絵を描かせていただいた。市民の中からもひまわりのあるところに行こうかといった声も出てきたと聞いている。景観の関係もあるのでむやみやたらに絵を描くことは出来ないだろうが、市民にとって愛着のあるものとして親しまれるのは非常に大切なことだと感じた。
- 緒方会長 平成27年度の予算等はすでに話し合われている途中にあるので、今言った意見は平成28年度にしか反映できない。また、現在から第2回目までに意見を言わなければ、平成28年度の予算には反映できない。積極的に意見をいってほしい。
- 志賀委員 平成29年に古賀市の市制20周年を迎えるが、それに向けてなにか動いているのか。また、まとめる部署はどこか。
- 事務局 まだはっきりとした取り決めはしていない。しかし、執行部の中ではなんらかの催しを計画したいとの意見は出ている。そうなれば、個人の意見としては経営企画課あたりが取りまとめることになるのではないかと考えている。
- 古賀委員 26年度の報告の中で、地域の魅力発見講座はとてもいいと感じた。また、レッツトライ！プロジェクトについては、非常に重要な取り組みであると注目している。私も同じような事業を福岡市で開催したり、他都市での開催をお手伝いしたりしたが、課題に挙げたことは私も感じた。27年度の本講座の内容について、来年度は26年度の企画を実施する年なのか、それともまた講座として開催するのかお伺いしたい。
- 事務局 現段階では講師との打合せも終わっていないのではっきりとは申し上げにくいですが、予定としては企画の実施ではなく今年度と同じような講座形式で行いたいと考えている。今年度上がった3つの企画のうち、3月の市民ウォーキングで羊の毛織体験が実施予定であり、KOGA 恋ダンスフェスタという古賀市音頭をアレンジし、オリジナルのダンスで競い合ってもらうダンスフェスタについては県の補助金を使って実施のために動いているため、来年度は改めて企画をつくっていききたいと考えている。
- 古賀委員 面白い企画が動き始めているようなので、期待したいと思う。市制20周年にからめた事業計画をしたり、アクションプランの課題解決のための提案をしてもらい予算化したりする等の方法もある。手法の一つとして参考にしていただけたら。
- 緒方委員 2面性があると思う。自主活動を行うグループももちろん必要だが、行政をサポートする人材も合わせて育てていく必要がある。行政として何を目指しているかということを中心に議論していかなければならない。
- 坂崎委員 コーディネーターとして入っているので申し上げにくいですが、拠点をつくるとか人を育てるとかいう面では非常に重要な事業であると思う。計画をつくる段階で既存の団体について調査したが、人材がいない、高齢化しているという課題がある。それらを解決するきっかけづくりにもなっている。人材の発掘という面でも初めて見る人もいた。実際に企画の実施にもつながっているので、成果のところまで謙虚に触れているが、とても貴重な機会であると考えている。古賀委員のお話にもあったように、次のものにむけて話し合うことで新しい発想に気づけるきっかけづくりにはなるのではないかな。非常にいい事業であると思う。

- 緒方会長 参加者の年齢層はどれくらいか。
- 事務局 年齢の高い方もいらっしゃったが、みかんの農家の方や、薬王寺温泉の女将さんや社長さんも参加されていた。平均年齢は40後半だったと認識している。活発に意見が交わされており、行政としてもすごいと感じていた。
- 緒方会長 民間の方に入ってもらおうということは費用対効果のことなども参考になるので、大変いいことだと思う。
- 坂崎委員 市民の発表の機会は豊富にあるように見えるが、全体的にみてレベルの高い文化芸術を学ぶ機会が足りないように感じる。宗像市では中村さんという兄弟の方がアート活動をされているが、地元の人たちをあつめてワークショップを行っているが、周りより市民の方がとても評価している。市民参加型もちろん必要であるが、もっと本物の文化芸術にふれる機会があればと思う。
- 緒方委員 古賀の文化人をリストアップしようという動きも過去にはあった。新たに事業を起こすのは負担になることもあるので、既存の事業の中に文化人のワークショップをいれたりするのはいいと思う。そういった人材はいるのか。
- 坂崎委員 美術館がコレクションしている作家などもある。しかし市民が知る機会がない。もっと市民に周知していけたらと思う。
- 志賀委員 来年度の芸術祭では、古賀の宝と称して古賀の文化人の作品展示を考えている。情報収集が必要となるが、古賀の素晴らしい宝を周知できるような展示を行いたい。
- 緒方委員 圧倒的な驚きや感動は文化芸術の振興を行ううえで大切である。自分の目で見て、ふれる機会を取り入れていけば、市民レベルもあがっていくのではないかな。今、お話を聞いていてわかるように、文化協会を含めて自主的な団体がとても頑張っている。他にないと思う。我々が出来ることとして色んなアイデアをこの場に出していくことが今後の活性化につながるのではないかな。
- 河村委員 もともと文化という言葉は、人間の思考法・価値観・行動様式を民族単位として規定するものだといわれている。芸術という狭い範囲にとらわれるのではなく、もっと広い意味を含むものだと思う。古賀市で行われている事業が多く記載されているが、これほど素晴らしいことが行われているのを我々が職場人間の時は知らなかった。市民の7～8割が仕事している中で、興味があっても参加できない環境にある。入りたくても入っていないという、大きな潜在的な問題がある。どうにかして解決方法を見つけていけたらと思う。関連して、オーストラリアで研究をしているときに面白いと感じたのは、英語で「ラーニング・エクスチェンジ」という「相互学習の方法」だ。オーストラリアは多文化社会で、様々な人種の人々がいる。その中で民間の自主グループが事務局となり、講師料などのやり取りもなく自分がしたいことや出来ることを申し出て、小グループをつくり、学びたいこと教えたいことを柔軟に組み合わせていく活動をしていた。大変興味深い文化活動で、経験豊かなボランティアや人材が見出せる古賀市には、こうした自主活動を促すこともできるのではないだろうか。一度設定されたプログラムや組織を固定化するのではなく、小さな文化グループが自由に柔軟に活動する手助けを行なうことなども、今後大切だと思う。
- 緒方会長 市民に情報が浸透するには継続しかないのかなと思う。レッツトライ！プロジェクトなどもまさに相互学習の場にもなっており、市民が自由に自分たちがやりたいことを見つけ、地域にいる人たちが先生になっていく。そういった相互に高めあうコミュニティになっていける要素を古賀市は持っていると思う。
- 米倉委員 この間、入院している認知症の母が孫が歌うチューリップの歌で一緒に手をたたきなが

ら歌っていた。子どもの力、歌の力を改めて感じた。その後に童謡まつりに伺ったので、とても感動した。古賀市の歌があるとのことだが、知らない。芸術的な才能がなくても歌は誰でも歌える。もっと歌を広めてほしい。また、坂崎委員の話にも出たが、身近に本物の文化芸術を鑑賞できる機会があればいいと思う。

古川委員 アート・バスに関して、本物の芸術作品を美術館に見に行く機会には、美術部中心になると思うが参加していきたい。また一方で、素晴らしいものは遠くにあるという印象を持ってほしくない。昨年美術館にいった人について学校で口頭アンケートをとったが、ほとんど手が挙がらなかった。理由をきくと、難しい、わからないといった意見があった。見たときに意味がわからなくても、時が経ったときに色々な情報を知るきっかけになる。そのときそのときに完全に理解は出来ずとも、芸術にふれることに意味がある。見たり、観賞するまでの過程に苦痛を感じてほしくない。イベントのチラシを配布する機会が多くあるが、担任も地元の行事であることを理解して一言添えるだけでも違う。たくさん行事がある中でそれを伝える教員の責任も感じた。

緒方委員 イベントなどはつい他人事になりがち。今の話にもあったように一言添えるだけで自分に関連して考えるきっかけになる。イベント紹介も丁寧に行っていただけたらいい。文化芸術は人を育てるというが、つまり「わかる人」を育てることだと思う。しかし、傾向として疑問をもったり自分で調べたりというプロセスが飛ばされて、どうしても結果だけになりがち。わからなければ答ええないなど評価を気にすることも多いように思う。感じたまま話す、見つけたものを言いあえる場がコミュニケーション活動にもつながる。アート・バスはそういったことを体験できる機会であると思う。アート・バスに限らず、乳幼児期から見る・気づく楽しさに気づいてもらえると、保護者世代の中間層の取り込みにもつながるのではないかな。

7 その他事項

事務局 ようやく生涯学習センターの建設に着工した。来年の夏に生涯学習センターが立ち上がり、研修棟の取り壊し、駐車場の整備を経て、平成29年1月か2月にグランドオープンの運びとなる。生涯学習センターでは古賀の文化人の作品を展示予定である。

中山副会長 学校で芸術家のワークショップ等を行っているのか。情報が届いているのか気になる。

古賀委員 私のところでも一覧は作っているが、配布しているのは福岡市が中心。私たちが配布している一覧に関しては、直接アーティストへ依頼があるので正確には把握していないが、アーティストから徴収したアンケートでは学校からの依頼はほとんどない状況にある。

中山副会長 先生たちにも情報が届いていないのかもしれない。どうやったら子どもたちが学ぶ機会が増えるか考えていけたらと思う。

緒方会長 先生たちは外部の情報を取り入れにくい状況にあると思う。情報提供は教育委員会の仕事の一つであるので、しっかり行っていただけたらと思う。

8 閉会のことば